
夜宴

森上 木一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜宴

【著者名】

森上 木一

N8280E

【あらすじ】

突然夜中のパソコン画面に打ち出された謎の散文詩。そして最後の夜に宴が始まる…

夜中、目が覚めると、煌々と眩しい光が眼を襲つた。起動したままのパソコンがファンを回す音が低く聞こえる。

どうやら、原稿を打っている間に書斎で寝てしまつたらしい。夜眼に急にパソコンの発光が当たつたので、一瞬視界が白くなる。眼が慣れてきてから、書き途中の原稿を確かめる。原稿といつても趣味で書いている素人小説だ。保存しようとしてマウスを動かすが、すぐに止める。

覚えのない文字群が見えた。

気になり、意外と冴えた頭で画面を見る。

物狂うのは夜。あなたが気づかないだけで、夜の獣は深淵から這い上がり、そつと枕元に現れる。

そして耳元で囁く。

少しずつ取り込む。

綺麗な色をした怪物はいずれあなたを呑み込む。そう遠くない未来に。

私はあなたに喚ばれたのだから。

そして、あなたは私と同調し、私とあなたはひとつかひだの躰になる。美しく心地好い。

そして私は夜警となりまた、夜賊となり、永遠に夜を這いすり回る。

それは物語というより、詩うただった。

この奇妙な散文詩は一体誰が書いたのだろうか。

今、家には私と私の妻しかいない。

妻が、私が眠っている間に書斎に忍び込み書いたのか。いや、妻に限つてそんなことはしないだろう。これが悪戯にしろ、嫌がらせ

にしろ、いつも私に関心のない妻がこんなことをするはずがない。悪戯や嫌がらせの類ではなく、これが本気の沙汰ならばわからないが……。

もしくは、私でも妻でもない何者かがいて、これを書いたのか。では一体誰が。私は背筋が凍るのを感じた。

ひとまず、これを保存し、妻の眠る寝室へ向かった。

明くる朝。

私は前夜のこと妻に話した。

すると妻は、

「私がそんなことするわけない」

と言い捨て、さつさと家を出て行ってしまった。その時の妻の態度に私は、普段私を見ては長い溜息を吐く妻とは違う、焦りのよつなものを感じ、少し違和感を覚えた。まさか本当に妻がやつたのだろうか。だとしても意図が分からぬ。

その夜、妻が寝た後も、私は書斎でパソコンに向かい文を綴つていた。どうしても気になるので、今夜は書斎に籠り、夜通し見張ることにした。

昼のうちに買っておいた栄養ドリンクを一息に飲む。

深夜一時頃になり、私は画面の今書いたばかりの文を見返った。

稚拙な文だった。

徐に自負していたわけではないが、昔から文章を紡ぐのが好きだった私は、そこそこに自分はいいものが書けるものだと思っていた。だが実際文章を書いてみると、途中で行き詰ったり、見返した文が支離滅裂だつたりして、幾度もがっくりとした。

これは趣味だから、と言い切るのでさえ、不安で仕方がなくなっていた。

そんなことを考えていると、今こうして妻を疑い、部屋に籠もっている自分が嫌になってきた。

妻とうまく折り合わない。妻が日中何をしているのかもわからない。趣味も、一端の物にすら遙か及ばない。

もうやめようと思い、パソコンの電源を切り、寝床に入った。
栄養ドリンクを飲んだせいで、覚醒し、なかなか眠れない。そのうちに言い知れない不安がよぎり始めた。

もしあの謎の文を創造したのが妻ではなく、得体の知れない何かだったら。見た目からして恐ろしい何かが夜な夜な現れ、書斎でパソコンを打つのを想像した。はたまた、まるで目に見えない何かがいるかのように、パソコンのキーが勝手に上下を繰り返しているのを。

考えてみると、あの文章も妻が書いたとは思えない内容だった。
私は身を捩り布団に潜り、ひとり震えた。

いつの間にか寝ていたのか、朝日と覚醒の感覚がある。睡眠が足りないような気だるさがある。

「昨晩何かおかしなことがなかつたか？」

「あなたが書斎に行つたこと以外何もなかつたわよ」
妻が不気味なものでも見るよう私を見ている。私には謂われのない視線だった。

居たたまれなくなり、私は書斎に向かつた。ドアを開けたところで頭の先から全身が粟立つた。

パソコンが起動していて、ワープロ画面にまた謎の文章が綴つてある。またあの散文調の詩だ。

夜は明けるが、私はあなたの中にいる。
もう少し我慢しよう。

眠るように待とう。

今夜は夜宴。踊りは夜踊るのだ。
夜宴はもうその鎌首を擡げ始めた。

一体誰が…

妻か、侵入者か、まさか靈ということは…。私はそれを保存し、パソコンの電源を落とした。なぜかそれを消すことは考えなかつた。

その夜も私は書斎で原稿を書いていた。

昨日の原稿を見てみると、何も変つたことはない。謎の文章が、私の拙い物語の途中にめり込んでいる。

今日は頃合いを見て、寝室へと向かつことにした。妻は静かな寝息をたてて寝ている。

同じ部屋で寝ているだけ、仲の良い夫婦に見えるかもしれないが、妻は烈しく私を疎んじている。生活態度、会話、私を見る目でさえ、蔑みに満ちている時がある。

私に落ち度があるとすれば、この引き込みがちな性格のせいだろう。不倫経験もないし、夜遅くに帰るといふこともほとんどない。ただ妻は持て余してしまつ。

思考を巡らしていくと、こつまにか眠つていた。目が覚めたのはまたしても深夜で、寝室のドアが閉まる音のせいでだつた。

暗闇に妻が立っている。輪郭だけがぼんやりと揺れていて、表情はわからない。

どこへ行つていたか訊くと、

「トイレよ」

と言つ。

ふと思ひ立ち、明かりを点け私も立ち上がる。不審げな顔をしている妻が闇に浮かび上がる。珍しく妻が私に問い合わせてきた。

「どこに行くの？」

トイレだと答えると、妻は更に訝しげな顔になつた。妻の視線を背中で感じながら、私はまっすぐに書斎に向かつた。

部屋に入ると、寝る前には消したはずのパソコンが、夜の闇に光を浮かび上がらせていた。

胸の高鳴りを抑えながら画面を見ると、ワープロソフトが立ち上がりており、何かの文章が書かれている。またあの散文詩が眼に映る。

あなたは既に私の虜だ。血と肉を欲し、人間を探して彷徨つ。

獸と化したあなたは、衝動に抗えない。

正気は昼だけの玩具だ。

夜宴はもうすぐ始まる。

煌びやかな真っ赤な花の装飾をあなたが胸に留め。

私はそつとあなたを押すだけ。

私はある程度の確信をもつた。恐らくこの文章は妻が書いたのだ。タイミング的にもそれしか考えられない。

そして部屋を出ようとドアを開けて、私は息を飲んだ。

妻が部屋の前に立っていた。

「こんな夜中になにしてるのよ」

非難めいた言い方に恐れの色が窺える。

「そつちこそ何をしにきた」

妻が押し黙る。暫くの沈黙。妻の顔はパソコンの光にのみに照らされ、表面に妙な影の曲線が描かれている。

沈黙を破ったのは私だった。

「お前、一昨日から勝手に俺のパソコンに色々打ち込んでいるだろう…一体何がしたいんだ。言いたいことがあるなら口で言え、大体こんな理解のできない文…」

そこまで言つて私はパソコンを見た。そして思わず奇声を上げそうになつた。今、まさに新たな言葉が打ち込まれているところだつた。

黙つていた妻が話出した。パソコンの異変には気付いていない。

「だから、そんのは知らないって言つたでしょ。私はね、あなたが何か企んでいるんじゃないかって不安になつて来たのよ。夜中に

何度も起きだして。部屋を抜け出して何をしてるのかつて

夜中に何度も起きて？妻がそう言つてゐる間も画面では、文が一

つひとつと完成していく。

「別に下手な文を書いてるだけなら氣にはしないわよ。でも一人でぶつぶつ喋りながら起き上つて、声を掛けともまるつきり反応がないで。氣味悪い」

そのうちに妻は何か鬱憤を晴らすかのように喋り始めた。狂つたように。いつものことだ。私と妻との間に会話は存在せず、妻の方的なスピーチ形式になる。

私はそれを黙つて聞いていた。そのうちに段々と妻の声が遠くなつていく。視界が霞がかかつたようになる。私の意識が薄れてきているのだ。だが妻は気にせず喚き散らしている。

おかしな感覚だ。意識はぼんやりとしているのだが、完全にないわけではない。だが五感はすべて通常よりも感度が下がり、夢の中にいるようだ。

「ちょっと、ふざけてるの？」

妻の視線がキーボードの方に注がれている。私も釣られて妻の視線を追う。そして勝手に進む文章作成の原因を田の当たりにした。キーボードを叩いているのは私の手だった。意識とは別の何かがそれをさせている。だがなぜか予期していたような恐怖感がない。むしろ興奮してきた。何か広義での性的な興味、つまりフェチズムを満たさんとするときのような興奮が。

そしてすべてを書き終え、私は立ち上がった。ふらりふらりと歩きだした私に気づかないのか、妻は動く私に対応するように、その都度向きを変えるだけで、私を罵倒し続ける。妻もある意味狂気の沙汰だった。

頭の中でパソコンの画面のように、光が明滅している。そこには、愛おしい彼の文章が綴られている。私が先程打ち終えたばかりの最後の散文詩が。

夜宴の準備は整つた。

あとはあなたが深紅のブローチを手に入れるだけだ。

夜の玩具は銀色のナイフ。

さあ一緒に啜^{すす}ろうではないか。

散文詩が終わり、私は恍惚とした気分で立っていた。
手には包丁を握りしめている。

我を忘れ喋り散らす妻。

朦朧とした意識の中で包丁を構える私。

躊躇いはなかつた。勢いをつけて妻の懷に飛び込む。妻は目を見開いて倒れる。

見下ろす先に、妻が横たわっている。

書斎の絨毯が真つ赤なカーペットのように染められている。

体の感覚が戻り始め、視界の霞も徐々に晴れていく。

意識が正常に戻ったとき、私の胸には深紅のナイフが突き刺さつていた。先に妻を刺して、噴き出た血で赤い花弁のような模様がついた銀色の包丁^{ナイフ}が。

それですべてわかつた。

あの文章を書いたのは私自身だ。

悪魔に触れたわけでも、心靈に取り憑かれたわけでもない。紛れもない私自身が、思い、選び出した拙文だ。

妻が憎かつたわけではない、人生に諦めを感じたわけでもない。

ただ私が意識せず書いたこの文章に、美しい最期^{エンド}を与えたかつただけだ。

そして夜宴は終わつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8280e/>

夜宴

2010年10月8日15時27分発行